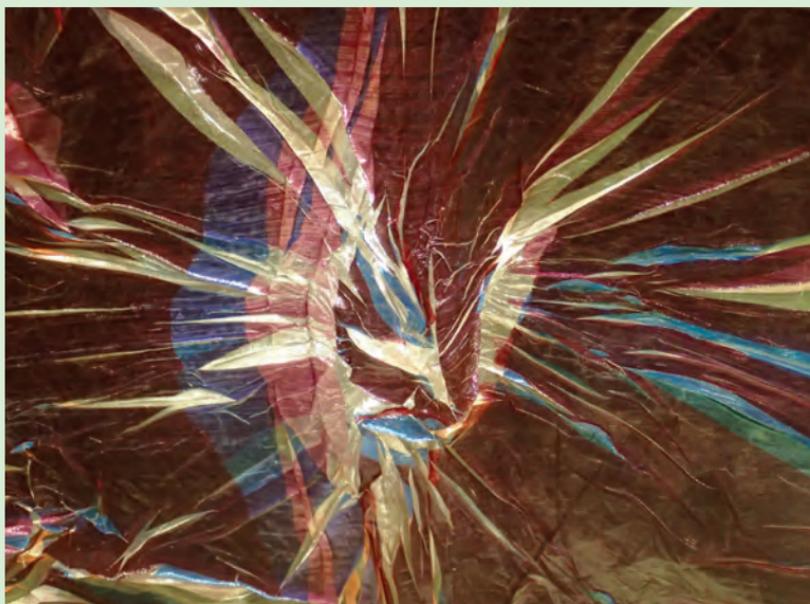


群馬の現代染織

— 産業からアートへ —



黒田亮子 著

みやま文庫

序 文

平成十七年（二〇〇五）二月、私はニューヨークに出かけた。その前年の秋にリニユール・オープンしたMOMA（ニューヨーク近代美術館）を訪ねるためであった。展示作品を生かしたMOMAの建築空間と照明は期待通りの見事さであったが、建築とデザインの部門に入ったとたんに目に飛び込んできた光景には、驚きと喜びで身動きができなくなった。真正面に懐かしく美しい布の一群がのびやかに広がっていたのである。

それらは新しい空間と照明の中で、私の記憶の中の姿を超えて繊細で洗練の極みを見せて生きと躍動していた。八点展示されていた布はすべて日本を代表するテキスタイル作家のものであったが、そのうちの七点が群馬に関係のあるものだった。桐生在住の新井淳一、同じく桐生を制作の主要拠点とする須藤玲子、岡野優などの作品である。「懐かしく」と記したのは、私が在職した群馬県立近代美術館では、用の美を持つ工芸という枠を超えて作者の精神までも表現する布を、美術作品としてすでに何度か展示していたからである。

生糸の生産と並んで群馬の染織の歴史は古い。しかし、それが用途を持った消耗品であったために、産業としては高く評価されても文化や美術と結びついて考えられることは少なかった。ま

た、時代の変化によって和服の需要が少なくなるにつれて、かつての繁栄は変質せざるを得なかった。しかし、群馬の染と織の伝統はしっかりと積み重ねられ、そこに優れた才能が働きかけたときには、作り手の精神を担った芸術作品としても世界に評価される現代の布を生み出す豊かな土壌を作り上げたのである。

思えば、昭和初年にも、群馬の染織品が国際感覚の中で高い評価を得たことがあった。県立近代美術館の設立にも大きく貢献した井上房一郎の試みである。井上は、一九二〇年代のバリで青春期の八年を過ごし、帰国後は家業の建設業を継ぎながら地域を活性化するためにさまざまな事業を展開したのだが、最初に手がけたのが地場産業として作られてきた木工品や工芸的な製品のデザインを洗練させて、人々の生活に美を加え、また産業としても時代に適う競争力をつけることだった。そしてその中に染織品もあった。彼はそれまで着物の裏絹として流通していた高崎絹にモダンな捺染を施し、また着物地として織られていた伊勢崎銘仙を広幅の洋服地に変え斬新なデザインを考案して、洋服の時代に適応する努力をした。彼が群馬に招聘したブルーノ・タウトもそのデザインを残している。これらの染織品は軽井沢と東京の銀座に彼が開いた《ミラテス》という店で、当時の文化人や、大使館関係者を始めとする欧米人たちの間で評価され、飛ぶように売れたという。

富岡製糸工場の世界文化遺産登録運動の始まる頃から、群馬の地場産業としての製糸、染織に

ついでには大きな光が当てられ、多方面からの掘り起こしが始まり、私達の誇る産業としての全容が紹介されるようになった。

本書の目的は、この豊かな染織産業の蓄積の上に生み出され、世界的に評価を受けている、群馬が生んだ「表現する布」つまり「アートとしての布」を井上房一郎の工芸運動を起点に、産業とアートを結んで布の魔術師として世界に評価される新井淳一までたどり、さらにそれぞれに群馬の染織産業に深い思いを抱いて、用の美を持ちながらもアートとして自分の世界を表現する染織作家たちを四章に分けて紹介しようとするものである。

第一章では井上房一郎の工芸運動の中の染織作品制作について、第二章では群馬の染織産業の中で仕事をしながらも、独自の芸術的な染織作品を創作するまでになった、いわば産業とアートの架け橋とも位置づけられる職人でもあり作家でもある人々について、第三章では革命的な手法で染織作品をアートに位置づけた新井淳一と、彼と共にまだ見ぬ布を追い続けたテキストルデザインーと研究者について、第四章では群馬の染織産業に深い思いを抱きながら、伝統的な染織技法を使って、或いは独自に開発した技法で自分の内面世界を表現する作家たちについて紹介する。

目次

序文

第一章 井上房一郎の美しい布…………… 3

ミラテス工芸運動への序章…………… 5

群馬県工業試験場高崎分場／高崎の染色業／井上工芸研究所／タスパン組合

ミラテスの誕生…………… 17

捺染服地／捺染服地の製作場所／捺染服地のデザイン／広幅銘仙／

広幅銘仙のデザイン／ホームスパン／不思議な言葉『ミラテス』／

ミラテス軽井沢店

ミラテスの染織に関わった人たち…………… 33

裕アデリア／中野フェリシタ／蜂須賀年子／ブルーノ・タウト／上野リチ

美術家、井上房一郎…………… 55

第二章 産業とアートを結ぶ染織職人・染織作家……………73

井上房一郎が注目した染織職人・染織作家たち……………74

境野三次／山崎青樹／荒島武彦

高崎の染色産業から染色作家へ……………101

藍田正雄／藍田愛郎／菊池宏美

伊勢崎紜の原点を求めて……………113

芝崎重一／齋藤定夫

第三章 新井淳一とまだ見ぬ布……………123

新井淳一……………125

布の魔術師／スリットヤーンとメルトオフ／民族衣装との出会い／

ファッションデザイナーたちとの協働と「布」の店／